

会津漆器

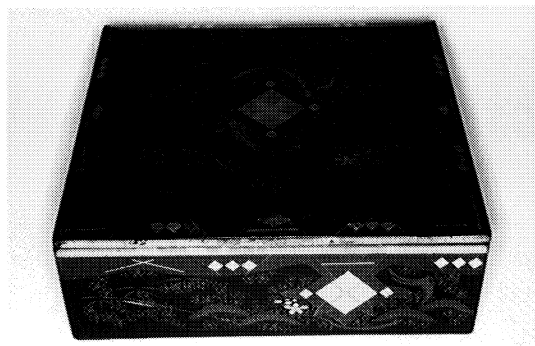
会津絵

会津塗が産業として興ったのは、天正十八年（一五九〇）の蒲生氏郷の入封以来とされています。近江（滋賀県）の日野から氏郷に従



会津絵洗杯

（ ）の頃になると、「会津絵」と呼ばれるデザインが描かれた漆器群が作り出され、それは吸碗から文房具にいたるまで、様々な器物に及びました。別名「松竹梅絵」と呼ばれるように、そのデザインには松竹梅が多く用いられ、その他に枝菊、破魔矢などからなりまします。松と竹は緑、その幹は朱で、梅と枝菊は朱や黄で描かれます。破魔矢は黄漆の他に消粉蒔絵とい



会津絵重箱



会津絵喰初椀

つてきた職人たちに屋敷を与え、産業振興政策を行いました。保科・松平時代になると、漆木の保護や漆液の質の改良、塗師の統括など、新しい政策の下で次第に制度化されてゆきます。十八世紀前半頃から会津藩の財政が悪化してゆくと、藩政改革として殖産振興が図られることとなり、伝統的な漆器産業の改善に力が入られました。

こうした中、文化・文政（一八〇三

う非常に細かい金粉を蒔きつける技法で描かれたものもあります。縁にはうるみ漆（橙）の雲型の上に黄漆で平行線が描き詰められ、そこに菱形に金箔を押ししています。会津絵重箱に見られるような、中心から点对称にひろがる構図も、会津絵の特徴の一つに挙げられるでしょう。

彩漆で描く漆絵に蒔絵を併用した可憐な会津絵は、長崎の出島を窓口として輸出も行われ、昭和初期頃まで作られ続けました。